

「あいこう・ふなこ9条の会」ニュース

岸田政権 戦争国家づくり着々と 重要経済安保情報保護法案を国会に提出

2月27日、岸田政権は、「重要経済安保情報保護法案」(経済秘密保護法案)を国会に提出しました。漏えいに罰則を科す国家機密の範囲を、経済安全保障に関わる情報にも広げる「特定秘密保護法」の経済安保版です。秘密の範囲が大幅に増え、国民の知る権利や表現・言論の自由を侵害する「物言えぬ社会」づくりを一層進めようとする重大な法案です。

何が秘密か基準が不明

法案は、重要インフラや物資の供給網などが漏えいすれば、日本の安全



従業員とその家族にも 事実上の思想調査

一方で政府は、米国など外国政府のほか、基準を満たした企業や研究機関に重要経済安保情報を提供できます。その場合、従業員は情報漏えいの恐れがないかどうか「政治上その他の主義主張」などの適性評価を受けることとなります。事実上の思想調査です。対象は、本人だけでなく、配偶者、

父母、子、兄弟姉妹、同居人などにも及びます。本人には、飲酒の節度、借金をはじめ経済状況などの調査も行われます。適性評価は、本人の同意が前提としていますが、断った場合には不利益を被る人権侵害にさらされる恐れがあります。

漏洩には厳罰 取材活動などに制限

情報を漏えいした場合、最高5年の拘禁刑

(懲役と禁錮を一本化したもの)が科されます。漏えいの共謀・教唆・扇動も最高3年の拘禁刑となります。ジャーナリストの取材活動などが重要経済安保情報を漏えいさせようとしたとして、処罰されかねません。

物言えぬ社会に 戦争国家へのSSの1環

米国の要求を受け2013年に成立した特定秘密保護法は、軍事、外交

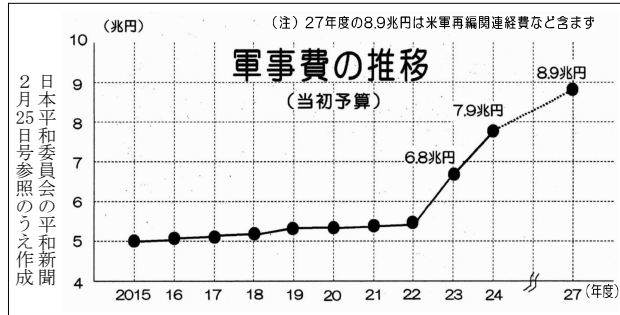
憲法審査会は今！緊急院内集会開かれる

岸田政権が憲法9条を踏みこむ大軍拡を強引に進めるなか、「緊急院内集会」憲法審査会は、今！が2月22日、国会内で開催されました。主催は「九条の会」と「総がかり行動実行委員会」です。集会では、派閥のパーティー収入をめぐる裏金事件で揺れる自民党に改憲を語る資格はないとの発言が相次ぎました。九条の会世話人の浅倉むつ子早大名誉教授は、軍拡増税で国民の生活が破壊されていくとして、「戦争が始まったら決して止められない。だからこそ、戦争を始める準備をしてはならない」と強調しました。九条の会事務局、「許すな！憲法改憲・市民連絡会」共同代表の高田健さんは、岸田首相が自民党総裁の任期中に改憲に取り組む意思を繰り返し示し、今国会の施政方針演説では「条文案の具体化」を進めると表明したことを挙げ、現在の憲法審査会は「嵐の静けさだ」と警鐘を鳴らしました。憲法審査会を長年傍聴してきた経験から、「今が一番大変な時期だ。これ乗り越えれば、もう一度この国を新しい戦前ではない時代に巻き戻せ」として、国民的な運動に発展させる決意を表明しました。

24年度大軍拡予算の本質は、国土まるごと米国の弾除けになること

岸田内閣は2022年暮れに「安保3文書」を閣議決定し、「統合防空ミサイル防衛」(IAMD)などを新たに構築するため、安全保障関連予算を2027年度に国内総生産比2%＝11兆円に増額すると決めました。そのうち、防衛省所管の軍事費は8.9兆円になります。

「統合防空ミサイル防衛能力」とは、敵基地攻撃とミサイル迎撃をセットにしたシステムです。米国の目的は、台湾有事等で米軍が安全を確保しながら作戦を進行できる環境を構築すること。広範囲をカバーするIAMDを構築するために、米国の指揮統制システムに同盟国の部隊も組み込んで、切れ目なく一元的な指揮統制で運用することが必須とされています。日本政府が敵基地攻撃能力の保有とIAMDの構築に踏み出したのは、米国の要求に応じたもので、



今年予定される衆議院選挙は「亡国への道」か、アセアンのように「対話と外交の道」を選択するかが問われます。「9条を活かした対話と外交の道」と、一人でも多くの人に声をかけて、「亡国への道」をストップしましょう。

内井みちえ

多数抱えている日本の国土です。政府は報復に備えるとして、国内の基地の強化や火薬庫の建設などを進めています。国民の暮らしを見捨てて突き進むのは、日本を米国の「弾除け・捨て石」にする「亡国への道」です。

ちょっとサイエンス 偏西風はなぜ吹くの？

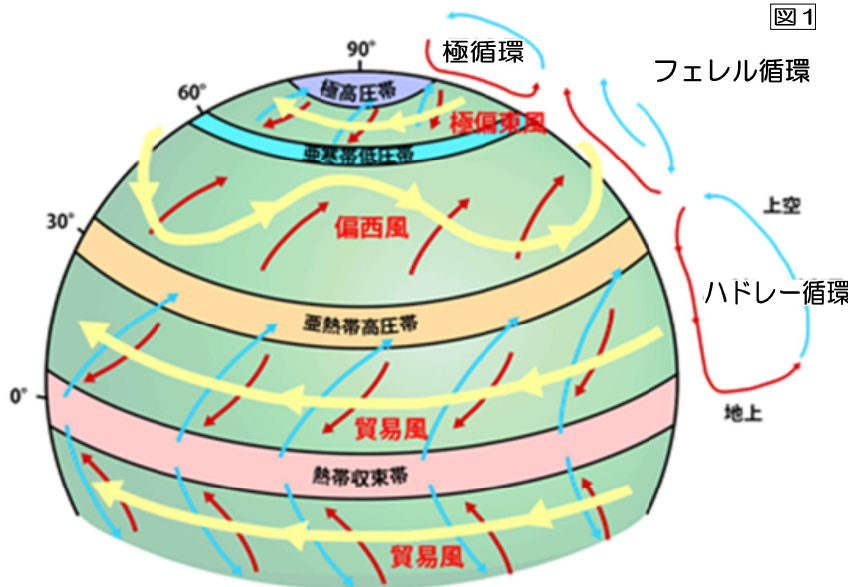
偏西風という言葉は皆さんご存じだと思いますが、西向きの風が常に吹いているメカニズムについては、余り知られていないように思います。そこで、今回は身近な現象「偏西風」が吹くメカニズムについて調べていきます。

地球は北極の上の方から見ると左回転をしています。その回転方向と同じ方向になぜ偏西風がいつも吹くのでしょうか。偏西風の説明をする前に、地球全体ではどのような風が吹くか、そしてその原因について調べてみます。

赤道付近では暑く、北極（高緯度の地域）では寒くなります。赤道付近では太陽熱によって加熱された空気は上昇して南北に振り分けられ、やがて冷やされると密度を増して下降します。これが大気の大循環と呼ばれるものです。ただし南北に振り分けられた空気は、北極まで到達するのではなく、北緯30度付近で温度が下がるために下降して、赤道付近へ戻ります。この循環をハドレー循環と言います(図1)。

一方、北極での冷たい空気は地上を這うよう南の方向へ広がります。北緯60度付近で温度が上がり、上昇して北極付近へ戻ります。この循環を極循環と言います(図1)。

北緯30度付近ではハドレー循環の下降する空気の流れによる高圧の部分(亜熱帯高圧帯)があり、北緯60度付近では極循環によって上昇気流による亜寒帯低圧帯があります。この高圧帯と低圧帯で生じた気圧の差によって南から北への空気の流れが生じます。これを気圧傾斜力による空気の流れ(フェレル循環)と言います。このフェレル循環による空気の流れに対して、地球の自転によって生ずる見かけ上の力“コリオリの力”がはたらい



て、空気の進む方向が変わっていき、北半球では西風(東方向へ吹く風)になります。これが偏西風の生じる原因です。

なお、“コリオリの力”については紙面の関係で次回以降に説明します。

(市川隆雄)